

## 下関支店（1）（金子三次郎の回顧録「随心録」より）

門司支店には、当時砂糖部、麦粉部、肥料部、塩業部、（神戸製鋼出張員 楠本氏）などがあつたが、未だ人員もあまり多数でなく、

西岡貞太郎支店長

会社の首脳 加藤重俊、村上重章

砂糖部 石田亀一、杉浦氏、三木醇三、川口寅吉、沢村雅喜

塩業部 相馬、元小栗、佃川、鈴木

会計 田中幾馬

肥料部 某々

庶務 加藤俊一郎

見習生 小生、武藤競、千北松吉

全員で二十五名内外だったと思ふ。

鈴木商店が大いに発展して大里で製塩、精米、製粉などの工場を次々に建設してゆくには人員も多数を要するし、門司の支店は建物が古くてせまいので、かねて下関市観音崎町で土地を求め、事務所（下関支店）を新築することになった。

※下関支店の住所は“下関市観音崎町五番ノ一”

表通りは観音崎町通で、裏はすぐ海岸でランチが直接横付け出来るし、海から門司方面を眺めた景色はまことに佳絶<sup>かぜつ</sup>であった。

この海岸の<sup>ところ</sup>處に和風の二階建をつくり、階下が社員の食堂で、二階には休息所があった。これに東側に隣接して和室が一つあって、ここに西岡支店長は随分永い間独身で起居しておられた。後に神戸から奥さんと娘さんと呼び寄せて、田中町の山の上に社宅が出来てそこで暮らすようになるまで、この海岸の部屋で起居せられておった。

田中町の社宅や合宿所が出来る迄、私達もこの事務所の二階を合宿所として起居した。しかし、人員が増加して二階を事務所に使ふことになったので、私達も皆田中町へ引越して、だれも会社には泊まらぬことにした。

（昭和 38.6.18 記）

## 下関支店（2）

下関支店の新築が出来あがると、門司支店は廃止となって全員下関に引越しました。独身者は、初め事務所の二階で起居したが、田中町の山の上の社宅と合宿所が竣工すると同時に、私も田中町の独身合宿所に移った。

二階建の立派な建物で、私達は六畳の部屋に二人宛起居することになった。  
隣接して西岡貞太郎支店長の社宅も出来て、此處に西岡主人と夫人・みか子さん、令嬢・文子さんの三人が住んでおった。

家族持ちの社員は少なかったが、石田亀一氏、安中氏、公文氏、竹村氏、筒井氏などがおられた。

此の合宿所には門限があって、夜の十一時になると番人が表の門を閉鎖することになっておった。若い元気な連中は、しばしば時間に遅れてこの門をかきのぼって、内部へ飛び降りたものである。

元気な連中で門限に帰れぬものは外泊をしてそのまま夜を明かし、翌日は出勤時間に直接会社へ出勤したものである。

私は此の独身寮にはかなり永く生活したので、色々の思ひ出があってなつかしい。

大正八年の結婚（\*）を迎へる迄、此の田中町の寮に起居しておった。

（\*）浅野三次郎（旧姓）は金子直吉の実弟・楠馬の長女、亀尾と結婚し、楠馬夫妻の婿養子となる。

（昭和 39.7.30 記）